

從來罪を犯す道具であつた軍隊を擧げて、贖罪の器としやうと思ふ、彼等は支那に攻め入つて神聖戦争に従がひ、偶像教の寺院を焼き拂つて回教の殿堂を建てねばならぬ、かくて吾等は罪を償ひ、神明の免しを得るであらふ、聖典は善行によりて過去の罪惡の消滅を説いて居る」といふのが彼の此の時の宣示であつた、名を宗教にかりて士心をまとめ、よつてその野心を逞しふするのは回教國の將士には誠に好個の手段である、此の如くにして強大な勢力なくば能はずと自から認め、支那征討の大軍は、一四〇五年正月八日、即ち永樂二年十二月八日に撒馬兒罕を發したのであつたが、さて此の軍を送るについては慘憺たる苦心を見うけると同時に、流石に彼が畢生の事業丈けあつてその軍容の雄大には一驚を喫せざるを得ない、先づ集まつた軍隊の數を見ると、當時彼の勢力範圍であつた各地方から二十萬の兵を徵集して、これならば「如何なる事業も成就するに足る」(戰勝記)と期して居るのであつた、尤も此の兵數のことは、彼のミルザ、ハイダールの書いたタリキ、ランディなる書物には、等しく戰勝記ザフアルナーマに據るとして八十萬と記して居るが、今日に傳はつて居る戰勝記には皆二十萬と見えて居るから、八十萬といふのは此の著者の癖なる誇張の言か、然らざれば偶然の誤りと見るべきであらう、さて此の二十萬の軍を支那に送るといふことは、その道筋のことを考がへて見ると實に困難な仕事である、帖木兒は曾つて今日の哈刺綽爾カラシヤールの北方なるウルツスの谷間まで押し寄せて來たことがあつたから、支那に通ずる此の地方の地理にはよく通じて居つたことゝ思はれる、それで天山の嶮阻を越え、沙漠不毛の地を渡つて大軍を遣る爲には、周到の用意が回らされて居る、即ち「此の長途の征伐に於て、糧食武器等の缺乏なからしむる爲に、諸將に諭して騎者各々一人について十人宛の人を伴はしめたが、此の外に穀物數千荷は軍用の車によつて運ばれた、これは道すがら種を蒔いて軍の歸路に於ける生命を